


魔女はパン屋になりました。



ディニアス

レイヴェンの護衛騎士。
家畜で忠実な性格。

レイヴェン

フルイン国の第三王子。
国のために必要とあらば
強引な手段に出ることも。

カティス&レイリア

グランシオの配下。
最初はアーヤのことを
敵視していたが――？

グランシオ

元は裏社会の人間で、
今はパン屋の従業員。
魔女の力に支配されており、
そのせいかアーヤに対して
異常な執着を見せる。

イザーク

第三騎士団の団長。
真面目で頼りになる反面、
少し無神経なところがある。

アルベルト

第二騎士団の団長補佐。
イザークのお目付け役。

アーヤ

“隷属の力”を持つ魔女。
前世は普通の日本人だった。
強すぎる魔女の力を持って余し、
ただのパン屋として
平和に生きたいと願っている。

登場人物
紹介

目次

魔女はパン屋になりました。

一 押しかけ番犬なんて困ります

二 自称番犬はやっぱり駄犬な気がします

三 犬からの貢ぎ物は受け取り一択のようです

四 駄犬の元部下がやってきました

五 犬の譲渡は、犬の気持ちが一番です

六 飼い主は最後まで責任を持ちましょう

番外編 自分の言葉で伝えたい

番外編 黒歴史を払拭したい

7

8

52

75

93

124

168

249

279

魔女は。パン屋になりました。

一 押しかけ番犬なんて困ります

月の綺麗な夜。

男が朱に染まった剣を一振りして、刀身に付いた血を飛ばす。

私の目に映るのは、その薄紅色の刀身。

桜みたいな色が綺麗、と場にそぐわぬことをぼんやり考える。

すると、ゆっくり近づいてきた男が、歪んだ笑みのまま腕を振り上げ――

「……………」

目を開ければ、自室の天井があった。

「ゆめ……………」

視線を窓に向けてもカーテンの隙間から差し込む光はなく、まだ陽が昇っていないようだった。

ベッドの上で身を起こし、何度か深呼吸を繰り返すと、速かった鼓動も落ち着いてきた。

たまに見るこの夢には、いつも暗鬱な気分させられる。

思わず溜息を吐いてしまった私は、ぱちんと両手で頬を叩いて気合を入れた。

ベッドから下りて着替え、鏡の前に座った。櫛で軽く梳いてから、前髪を編み込んでいく。それを落ちないようにピンとリボンで留めると、残った髪を後ろで束ねて紐で結わえる。くすんだ鏡に映った自分の顔が不格好な笑みを浮かべた。

裏口から外へ出ると、遠くの空がうつすらと明るくなるところだった。

夜から朝へと変わってゆく時間。まるでこの世界に自分しかないかのようで、私のお気に入り時間だ。

「よいしょ、と」

井戸から運んできた水を大甕に移し終えたと、腕まくりしてパン生地をこねる。

硬くて腹持ちのいい伝統的なパンを焼いた後は、同じ数だけ自分レシピのパンを作るのだ。

真っ白な粉に、適温にしたミルク、そして卵とバターと砂糖と塩を混ぜて、丁寧に揉み込む。きれいに丸めて、濡れ布巾をかけて寝かせておく間に、それとは少し配合が異なる生地をこねる。

最初の生地が優しく膨らんだら、余分な空気を出すため押しつぶすようにして成形する。四角い型に入れて角パン。延ばして丸めてロールパン。

一番多いのは角パンと細長いパンだ。角パンは二斤ほど薄切りにして、ハムやチーズ、野菜を挟んだサンドイッチにする。細長いパンは真ん中に切れ込みを入れてソーセージなどの具を挟む。

出来上がったパンを店先に並べていると、もう開店の時間になった。

私が住むフレインは、大陸の南側にある国で、美と芸術をこよなく愛するお国柄。夏は少々暑く感じることもあるが、冬の凍えるような寒さがないのはありがたい。

そんなフェレインの王都、その片隅の平民街にあるのが『ベイラーパン屋』。一人で切り盛りしている小さな店だけど、私にとっては大切なお店。

カララン、と来客を知らせるベルが鳴って、今日もパン屋の一日が始まるのだ。

——夢見が悪かったのは何かの暗示だったのか。

忙しい時間帯が過ぎた頃、苦手な人が来店した。

「こんにちは、アーヤさん。今日こそいいお返事を聞かせてもらいたいですね」

「わ、私、お店を売るつもりはありませんので……………」

勇気を振り絞ってそう告げてみたけれど、相手の眉間に発生した皺に、思わずヒツと声を漏らしてしまう。

目の前にいる男性はトルノーさんといって、商業組合長の親戚だ。うちの店を買い取りたいというところで何度も来店している。

「お店の経営はあくまでアーヤさんにお任せします。いわゆる雇われ店主になるだけです。給与もきちんと支払いますし、この店にも破格のお値段をつけさせてもらいます。これまでと生活はそれほど変わりませんか？ 従業員を増やす予定ですから、アーヤさんも楽になると思いますが……」

にこにこしながら畳みかけるように喋られるのは苦手だけど、頷くことなんてできない。

「……………お、お店……………この、お店は、ベイラーさんが私に遺してくれた大事なものの、なので、

て、手放すつもりは……………」

一時の大金とは別に、給料という定期収入も得られるというけれど、雇われ店主になったら、その後すぐに解雇される可能性だってある。私はここに住んでいるから、解雇されたら住む場所も同時に失うわけだけど、その場合の保障とかないですよね？

——そんな風に、内心では色々渦巻いているけれど、小心者なせいで言葉にはならない。うう……………私がこんなだから、相手も諦めないんだろう。

トルノーさんの目当ては私が作るパンのレシピだと思う。ふんわり柔らかいパンは、この世界では珍しいものだから。

何度もお断りしているのに諦めてくれないトルノーさんに、苦手意識ばかりが募る。

誰かお客さんでも入ってきてくれないかな……………そうすれば今日は解放される。トルノーさんは人の目を気にするようで、他の人が来るとすぐに帰っちゃうんだよね……………

他力本願な期待を込めて扉をチラチラ見ていると、トルノーさんが溜息を吐いた。

「まったく、強かなものですね」

「……………え？」

「好条件を引き出すための駆け引きですか。さすが、老夫婦に取り入った拳句、店まで手に入れた孤児は違いますね」

吐き捨てるようなセリフとともに、強く手首を掴まれた。

「私も暇じゃないんですよ。この辺で手を打って頷いてもらえませんか」

これまでの当たり障りのない笑みとはまったく違う、苛立ちを含んだ目で睨まれて、瞬時に身が竦んだ。

「……………こ、怖い……………!!」

思わず震えてしまったそのとき、

——カララン。

来客を知らせるベルの音に、トルノーさんの手が緩む。その際にサッと自分の手を取り戻した。安堵の気持ちとともに扉を見やれば、フードを被った旅人風の人物が店に入ってくるどころだった。少し裾の汚れたマントを纏い、大きな荷物を背負っている。

それを見て小さく舌打ちしたトルノーさんは、「また来るから、よく考えておいてください」と言い残して出ていく。

「……………とりあえず、助かった……………」

強張っていた身体から力が抜けかけたけれど、そこでハッと思い出す。そうだ、お客さんがいるんだった!

「いらつしやいませ。何をお求めですか?」

入り口に立ち尽くしているお客さんに、慌てて声をかけた。

店の棚に並ぶパンは、この世界では見慣れない形のもが多くて、初見のお客さんは戸惑うこともある。この人もそうなのだろうと思つて声をかけたのに、相手は微動だにしない。

困つて視線を彷徨させたとき、旅人の腰に提げられた剣に目が留まった。

「……………あ……………?」

つるりとした黒色の鞘を這う、複雑な文様。鏢の部分に輝く、紅の石。

——知っている

そうだ。私は、この剣を知っている。不思議な輝きを纏う刀身が、血に濡れるその姿を。紅の石が爛々と輝いていたことを。

目の前で振り上げられたそれが、とつともなく怖くて、ゾツとするほど綺麗で、目に焼き付いたあの瞬間を、私は、知っている

「……………あ……………あ……………」

ガタガタと勝手に震える身体を抱きしめるようにして後ずさる。私の視界の端に存在する数字が、ものすごいスピードで減っていく。

崩れるように床に膝をつき、それでも剣から目が離せないでいる私の前で、フードが翻った。さらりと赤茶色の髪が揺れる。長い前髪の間からこちらを見据えるのは、鋭い琥珀色の瞳。

「……………グ……………ラン、シオ……………」

どこか遠くから聞こえたようなその声が、私の口から漏れ出たモノだと気づいたのは、男が目を大きく見開き、次いでその口が、にやあつと歯を剥くように歪んだからだ。

——それはまるで、獐猛な肉食獣のような。

「……………みいーつけたあ……………!!」

「みぎゃああああああああああああ!!」



涙目で叫ぶのと同時に、視界の端に映る数字が“0”を示し、私の意識は途切れた。

この世界には、時折不思議な力を持つ魔女が発生する。

それは、異世界からの転生者。私も、その一人だ

ゆらゆらと、意識が揺れる。溢れる記憶の渦に翻弄される。

日本で日々仕事に追われていた私は、事故で死んだはずだった。それなのに、気づけば雪景色の中に一人佇んでいた。辺りに人はなく、何故か子供の姿になっていた。何より困惑したのは、自分がこの世界で魔女と呼ばれる存在になったと、自然に理解していたこと。

誰かに教えてもらったわけでもないのに、情報だけが自分の中にあるのはおかしい感じで、最初これは夢だと思っていた。けれど、白い布の靴は雪を踏みしめる感触を伝えてくるし、頭から被るだけの簡素な白いワンピースは冷たい空気を遮ってくれなくて………時間が経つごとに、これが現実なのだと思い知らされた。

心細さを抱きながら歩き出し、日が暮れてからようやく辿り着いた集落。そこにいた人たちに助けを求めた私は、あつという間に人買いに売られてしまった。

薄暗い檻の中に押し込められ、食べる、と乱暴に出されたのは薄いスープと硬いパン。空腹に耐えかねた私はそれを食べて――

それからのことは、よく覚えていない。

時々怒鳴り声が聞こえたり、誰かが檻から連れ出されることも、新しく入ってくることもあった。けど何も感じなかった。時折出される食事を口に運ぶ以外、心も頭も麻痺したかのように、ただ

ぼんやりと檻おびの中に座まっていた。

そんなある日、私たちは檻おびから出され、外で一列に並ばされた。月の綺麗な夜だった。ぼんやりと月に見入っていると、視界の端で何かが光った。そして上がる血ちじぶき。音を立てて崩れ落ちる人。理由なんてわからないけれど、次々と殺されていく。だけでも感じない。並んで立っていると言われたから、そうするだけ。

やがて、私の番が来た。

身体中が血に濡れた男がゆっくりと近づいてくる。長い前髪から琥珀色をした目が覗く。髪から滴したる返り血が肩に落ち、黒い服に染み込んだ。

男が剣を一振りすると、血が飛び散った。薄紅色うすべにいろの刀身は美しく、鏢つばに輝く紅色べにいろの石は光の加減なのか、男が動くたびにまるで脈打つかのように色の深みを変えた。

なんて怖くて、なんて綺麗なんだろう――

目に映るままにそう思ったとき、男が長剣を振りかぶった。

ああ、私、死ぬんだ――……………？

その瞬間、それまでぼんやりしていた頭が死の恐怖のためか、一瞬クリアになって――

死にたくないと、強く思った。

私は、無我夢中で魔女の力を揮ふるった。

次に覚えているのは、自分を殺そうとした男に抱えられ、揺られているところだ。

男は迫る追っ手を殺し、私を抱えて逃げ続けた。その逃避行とうひこうは、彼が私を他の大陸への船に乗せ

たところで幕を閉じる。私は、魔女の力で男を利用した挙句、彼を置き去りにして船出したのだ。

そのあと、何がどうなったのか……………ベイラー夫妻に見つけられたとき、私はフレインの砂浜に倒れていたのだという。たぶん船から落ちてしまったのだろう。助かったのは奇跡だと思う。

身内だと名乗り出る者など当然おらず、そんな私を夫妻は引き取って育ててくれた。

当初、私は笑うことはおろか、話すこともできなかったそうだ。

何年も経つにつれ、徐々に意識もはっきりしてきて、自分が魔女であることも、別の世界で生きていたことも、この世界で最初に受けた仕打ちも、あの男のことも思い出した。

けれど、私はそのすべてを胸に仕舞い込んだ。怖いことも辛いことも、自分がしたことも、魔女と呼ばれる存在だということも……………何もかも捨てて暮らすことを選んだのだ。

そうして、私は過去と決別して生きてきた。

今日このときまでは――

瞼まぶたを上げたら、自室の天井が目に入った。

視線だけを巡らせると、決別したはずの過去がそこにいる。

「目、覚めた？」

……………夢じゃ、なかった。

今まで、ここに来る前のことはあまり考えないようにしていた。きっとそれは、自分がしたことことを忘れてしまったかったから。忘れて、ただのパン屋の娘でいたかった。

「……………グラ、ン、シオ……………」

掠れる声でその名を呼べば、琥珀色の目がすうっと細くなった。

彼は、私の、犠牲者だ。

私を見下ろす彼の、長い前髪。その隙間から、琥珀色の鋭い瞳が私を見つめている。

形のいい唇が、ゆつくり弧を描き、三日月のような形になって――

「ごめんねえ。ここまで運ぶのに許可なく触っちゃった」

……………あれ？　こんな話し方だったっけ？

疑問に感じたけれど、当時の会話など思い出せない。うつすら残る記憶の中では、もっと殺伐とした印象なのだけれど……………？

じっと私を見つめるグランシオは、三十代くらいに見える。記憶の中の姿よりも、当然だけど成長していた。それもそうだ。あれから十年以上経っている。

精悍で男らしい顔立ちに、たくましい体つき。目つきは鋭くて少し怖いけれど、間違ひなく立派な成人男性だ。その事実が私の罪悪感をちくちく刺す。

でも目を逸らすことなんてできなくて、琥珀色の瞳を見つめ返した。

「ふふ、薬は完全に抜けているみたいだね」

「……………くすり……………」

ここに来たばかりのとき、まるで人形のような私を診てくれたお医者さんは、人を無気力に

させて操る危険な薬を飲まされるとベイラーさんに告げたそうだ。たぶん、食事に混ぜられていたんだろう。今思えば、確かに食事をしてから記憶が曖昧になったような気がする。

『それがアーヤの成長を阻害しているのか！　なんて可哀想に！』とベイラーさんは嘆いたけれど、後にその話を聞かされた私は複雑な心境になった。

周りの子供に比べて明らかに背が低い私を、夫妻が心配してくれていたのはわかる。だけど、元の世界でも童顔低身長だったので、たぶん薬は関係ないんだよね……………

「あんな状態だったあんなが、まさか俺の名前を憶えてくれてるなんてねえ。すっごく光栄」
ひく、と頬が引きつった。

……………光栄に思っているようには、とても見えない。目がなんかギラギラしているし、むしろすっごく恨んでいそうに見える……………

相手を刺激しないように、そうっと身体を起こしつつ、ベッドの上でできるだけ距離をとった。身動きするたびに追ってくる琥珀色の瞳に、必死で気づかないフリをする。

「あ、の……………どうして、ここに……………」

緊張のあまり出にくい声で、どうにか疑問を紡げば、彼は片眉を上げた。

「あんなが、俺のご主人様だからに決まっているでしょ？」

ぐっと息が詰まった。自分の顔が強張ったのがわかる。

「あなたの力は今も変わらず俺を縛ってる。そりゃあもう雁字搦めにね。それはあんなが一番よくわかっ――」

「……………?」

どこか愉快そうに喋っていた相手が、目を見開いて急に押し黙った。突然動きを止めたことを不思議に思い、何かを凝視するその視線を追うと、それは私の手首で——あ、トルノーさんに掴まれた部分、ちよつと痣になつて………?」

思わず反対の手で痣に触れた。指で押すと少し痛いけれど、これくらいならパンを焼くことはできそう。

ホッと息を吐いて顔を上げると、目の前でグランシオがブルブル震えていた。

ん? と瞬きしている間に、その形相が変わっていく。細められた琥珀の目は鋭さを増し、額に青筋が浮き出る。剥き出しになつた歯の隙間から唸り声が聞こえてきた。

「……………あ・の・ク・ソ・ヤ・ロ・ウ……………!! いつでもやれると思つて見逃したが……………ふふつ……………ふふふふふふふふ……………!! イイぜえ……………希望通り、なぶり殺しにしてやんよお……………!!」

ええええええええええ!!

クソヤロウってトルノーさんのこと!? 『やれる』って、間違いなく『殺れる』って意味ですよね!? そうとしか聞こえませんでしたけど!? あと、たぶん誰も希望なんかしてないよ!

ゆらりと立ち上がった彼に咄嗟にしがみつけれど、止めるどころか引きずられてベッドから落ちかけた。それに気づいたグランシオは丁寧に私を押し戻すと、扉に顔を向けて立ち去ろうとする。行かせちゃダメだと焦っているのに、私の口はあうあうと開閉するばかり。このままじゃ、また

私のせいでグランシオが誰かを——!

「……………『お待ち』」

私の声に、グランシオがピタリと動きを止めた。扉に向かおうとしていた身体がゆっくりと振り返り、琥珀色の目が私に向けられる。

私は寝台の上ですつくと立つと、右足を後ろに振り上げ——ドン、とグランシオの腹を蹴る。まったくの無防備だったのか、彼は呆気なく床に尻もちをついた。

『主人の心情を察することもできないなんて、下僕としての程度が知れるわね』
すらすらと私の口から紡ぎ出される言葉は、普通なら到底許容できないセリフだろう。しかし——彼はぎこちないながらも、その場に膝をついた。

「……………申し訳、ございません。ご主人様……………」

その身体はブルブルと激しく震えている。ギリギリギシギシと聞こえてくる歯ぎしり。こんな小娘に屈してしまうことを嘆いているのか。申し訳なきが私の胸を占める。

それなのに、唇は弧を描き、目も細めてしまうのだ。

『あら、謝るのはまあまあ上手じゃない。そうねえ、大としてなら品格かしら』

駄犬ほど可愛いというものね? とくすくす笑う自分に軽く絶望する。

視界の端にある数字が、がりつと一気に減った。

この世界で「魔女」と呼ばれる存在には、一人につき一つだけ不思議な力がある。

私の力は「隷属の力」。対象を自分の言いなりにすることができるとだ。

ただし、力を使うには必ず「代償」が必要となる。魔女が出てくる物語などを調べた限り、その代償は魔女によって様々で、魔女の宝物だったり、魔女そのものだったりした。御伽噺のような読み物も多かったので、本当かどうかはわからないのだけれど。

私が払う代償は、私自身の精神力。主に羞恥心を煽られ、それによって精神力がすり減ることで、魔女の力が発揮されるのだ――

……………なんで?! 責任者出てきて!! お話し合いましょう!!

……………もしも神様がいるのだとしたら、絶対に意地悪だと私は確信している。

隷属の力を使う間、私の身体と口は、先ほどのように勝手に動く。私の羞恥心が刺激されるような方向で。グランシオに対して偉そうに「命令」したのはそのせいだ。

私の視界の端には、常に小さな数字が浮かんでいる。これが私の精神力を表していて、それが減っている間、数字はカウントダウンされていく。隷属の力を使っている最中にカウントがゼロになれば、私は死ぬ。

……………ひどい。

ちなみに、魔女の力を使わずとも精神的に疲弊すれば、数字が減る仕様だ。力を使っていないときにゼロになったとしても死ぬことはない。ただし気絶する。

……………やっぱりひどい。なんなの、この仕様。

実は私、前世からかなりの恥ずかしがり屋で小心者なのだ。

何言ってるの? と思われるかもしれないが、ちょっとからかわれただけで赤くなったり青く

なったりと忙しい顔。手から脇から背中からと、至る所から噴き出す汗。もつれる足。どもる口。挙動不審ぶりが原因の失敗談は数限りない。だからこそ、できる限りひっそりと生きていたのだ。

仕事上ではなんとかなった。時間をかけて事前準備を完璧にすることで、ミスをして赤面してどもってコケるなどという事態は最小限に抑えられるようになった。『私は社会人。私は社会人。私は社会人』と言いつつ聞かせ、自分を騙して乗り切った。

私は心に波風の立たない平穏な生活を愛する小市民だったのだ。それが、何故こんなことに……………!!

この世界では、元の世界でいうところの魔女狩りなんてないみたい。魔女は、ただそういう存在なのだと人々に受け入れられる。魔女にとっては割と優しくして平和な世界といえるだろう。だけど、私は自分が魔女であることを隠している。

だって、「隷属」だよ? ………………恥ずかしいいいいい!!

「隷属の魔女」とか、絶対に呼ばれたくない!!

私のちんまい見た目に似合わなすぎて、そういう意味でもバレたくない!!

前世でも争い事が苦手で、会社の女性陣の派閥にも加わらず、ひっそりと過ごしていたのだ。何よりも平穏を愛していた私に、何故こんな力が……………!!

私の性癖とかそういうのは関係ないと断言できる。だって前世含めて年齢〓彼氏いない歴なのだ。二次元とかラノベとかちよっと薄い本とか嗜むことはあったけど、至ってノーマルなんですっ!! 誰かを従えたいとか、そんな望むどころか考えたくもない!!

どうして今更あんたを探したと思う？ 三年も」

「……………さんねん……………？」

どきりと心臓が跳ねた。それはベイラー夫妻が亡くなり、私が一人になった時間。

「魔法の力に支配されている俺には、あんたが強い感情を抱くと伝わるんだよ。三年前、あんたはひどく嘆き悲しんだ。俺が居ても立っても居られないくらい。何もかも捨てて、海を渡ってあんたを探すくらいに」

す、捨てた……………!?

「ままま、まさか、か、家族、とか、お友達、とか……………捨て……………!？」

「えー？ そんなのいたことないよお。捨ててきたのは仕事とか趣味とか、その他諸々？ あ、でもちゃんとカタはつけてきたし、ついでに家とか持ち運べないもんも含めて、ぜえーんぶん人に押し付け……………譲ってきたし！ すつきり身ぎれいだから安心してね？」

あつけらかんと告げられた内容に困惑し、どういう顔をすればいいのかわからずにいる間に、彼はそれまでの態度を一転させて視線を落とした。

「……………ああ、でも、ようやく会えたご主人様は、俺のこと知らないんだったね……………寂しいけど、ご主人の希望が一番だから……………俺、妥協する。俺が傍にいらなくても、ご主人の安全が守られればそれで……………ううん、それが、いい、んだよね……………」

寂しげに微笑む姿に罪悪感がこみ上げて、視界の数字がぐんと減る。

さつきから“犬”発言を聞いていたせいか、しょんぼりするその様子が捨てられた犬のようにも

見え……………いや、それは気のせいだよね。グランシオは立派な成人男性なんだし！

少しは冷静になったつもりだけど、かなり動揺しているのかも……………

必死に気を落ち着かせようとしていると、グランシオがパツと顔を輝かせた。

「そうだ！ とりあえずご主人様に害を為しそうな奴を一人ずつ闇討ちして、足の腱を切っていくのなんてどう？」

何が『どう?』!? どういう経緯を辿って出したその結論!?

あわあわと頬をひくつかせながら言葉を探す間に、相手は指折り理由を挙げ始める。

「それならそうそう店まで来れないしい、いざというとき、ご主人の足でも逃げられるでしょ？ ほら、ご主人可愛いからさあ、不埒な輩に狙われちゃうんじゃないかって心配なの。気遣いできる犬だからね、俺！」

『褒めて!』と言わんばかりだけど、気遣いの方向性に問題が……………!!

「そ、そんなこと、されたらっ、きゃ、客足途切れちゃう……………!」

ベイラーパン屋に行くとき足を切られるぞ、とか噂になるよね？ なんの都市伝説を生み出そうとしているの!?

「客足……………ふふっ。ご主人様ってば、うまいこと言うんだね」

……………違います。足繫がりでブラックなジョーク言いたかったんじゃないんです。

真っ青になってぶんぶん頭を横に振る私を見て、グランシオはクスクス笑った。

「ねえご主人？ 元がどんなに凶暴な犬でも、飼い主が手綱を握って可愛がってくれるなら、

なあーんの危険もないんじゃないかなあ？」

頬を引きつらせる私の顔を覗き込むようにして、グランシオが目を細めた。

「忠実な犬は、主の望み通りに動いて、主だけを見つめて、主だけに尻尾を振る。何者からも主を守り、決して裏切ることはない。この世の何より安全で頼りになるよ。」

「ご主人様さえ傍にいれば、ね？」

囁かれた内容に、全身に冷や汗をかきながら必死に頭を回転させた。

グランシオという男は、私にとっての暗黒歴史——であると同時に、どうしようもないほど罪悪感を刺激される存在でもある。

私は、彼の意思を無視して隷属の力で縛り上げた。自分が助かりたい一心で彼を支配し続けて、彼はその手を血に染めることになった。

間接的ではあっても、それは私自身が望んだこと。私が彼に人を殺させたのだ。それは消しようもない私の罪。たとえ、彼が元々人を害することを躊躇うような人ではなかったとしても。

胸に去来するのは悔恨に似た申し訳なき。彼は出会ってから今この瞬間においても、魔女の力に翻弄され続けている。それはすべて、私のせい。

彼は私の、紛れもない被害者なのだ。

被害者の希望を拒絶できるほどの凶太ざなんて私は持ち合わせていない。でも、人間を犬として受け入れると言われることには、ものすごく抵抗がある。

ごくりと喉を鳴らして、私はグランシオを見上げた。

「わ、わかり、ました……………」

グツと身体に力を入れて、乾いた唇を舐める。

「あなたを、うちで、その……………雇います」

語尾は小さくなってしまうが、ちゃんと聞こえたいらしい。少し間をおいて、グランシオが笑顔のままカクンと首を傾けた。

「うーんと？ 従業員とかそういうのじゃなくってえ、俺はただあんだの犬になり下がりたいたいって……」

「パン屋に番犬は置けませんよねっ！ ほら、食べ物扱う場所ですしっ！」

犬云々は比喩で、相手は人間だつて理解しているけど、とにかく犬とか下僕とか、そういうのから離れてほしい。じゃないと耐えられないっ……………！

私の内心など知らないグランシオは、顎に手を当てたまま天井を仰ぎ見て、何やら考え込む。

「……………俺以外の犬は過去現在未来のすべてにおいて、この店には置かないってことか……………それはそれでいい案だけど」

誰もそんな話はしてないけど、この際それは聞かなかったことにした。

固唾を呑んで見守つていれば、グランシオの目がこちらに向く。

「でも、やっぱり俺としては、さっきみたいに『駄犬』って呼……」

「犬ならば、お店には置けませんっ！」

悲鳴みたいに叫んだら、不穏な言葉を吐いていた口がぴたりと閉ざされた。

が、頑張れ、私………！　ここはたぶん譲つちやダメなところじゃないかと思うんだ。
震える自分を叱咤して、更に付け加える。

「い、今、このお店で迎えられるのは、お客様か、従業員だけですっ!!」

パンと二択を突き付けてやれば、グランシオはあっさり従業員になることを選んだ。

どうにか普通の関係に持ち込めた。そのことに安堵してもいいはずなのに、どこか余裕な態度を崩さないグランシオが気になる。『仕方ないから、ひとまず譲ってやったんだぜ』と思っていそうな気がしてしまうのは、私の被害妄想………なのかな。

男の人とお付き合いもしたことがないのに同居することになるなんて………と一瞬思ったけれど、これは客足を切られないためなのだから仕方ないんだと自分に言い聞かせる。

グランシオは私が嫌がることはしない。その点は間違いない。

それもこれも魔女の力のせいだけ………と考えるだけで数字が減る。………ホントにもうヤダこの仕様………

なし崩し的に従業員の雇用と同居が決まってしまったけれど、今まで人を雇ったことなどないので、賃金の相場がどれくらいなのかもわからない。

「後で、友だちのヤミンかサンジャに聞いてみよう………」

とりあえず、安くても一応賃金は払うこと、問題を起こしたら解雇することなど、いくつかの約束を決めて、グランシオが寝泊まりするための部屋を準備する。

「お金なんていらぬのにー」

背後からそんな言葉が聞こえるけど、それじゃあ雇用したことになる。「あんた専用の奴隷でいいよ」って爽やかに言わないで！　聞こえない。私は何も聞いてませんっ………！！

無視をするにも精神力が削られるということを初めて知った。疲れて遠い目をしていると、グランシオがうつとりした表情を浮かべた。

「ああ、ご主人の足元に這いつくばることを許されるなんて、今日という日を俺は決して忘れない」

………這いつくばっていいなんて誰も言ってません………

「俺の可愛いご主人様。どうぞこれからはグランって気軽に呼んでね」

にっこり満面の笑みを浮かべる彼に、弱々しく笑みを返すことしかできない。

こうしてその日、ベイラーパン屋は、番犬ではなく新たな従業員を迎えたのでした。

この世界には、前世の世界で言う酵母菌みたいな役割をする粉がある。普通のパン屋はそれと水と卵、バターを混ぜて焼くだけだ。でも、ベイラーパン屋は違う。

何を隠そう、私は前世で料理教室に通っていたことがある。嫁に行く予定などまったく言っていないほどなかったけれど、職場の同僚たちの盛り上がり具合に引つ張られて通うことになった。いわゆる人間関係を円滑にするためのお付き合いというやつだ。

最初はしぶしぶ通っていたのに、レパートリーが増えて（自分以外食べる人いなかったけど）、後片付けも面倒くさがらなくなり（一人暮らしになってからそれが面倒でほとんど料理しなかつ

た)、何より料理教室で女の子たちとキャッキャウフする時間が、それはそれは楽しかった。仕事で疲れた心が女の子成分でかなり癒いよされていた。女の子って偉大。

その料理教室ではパン作りもおこな行っていたため、何度か参加して作ったのだけれど、まさか転生後に役立つとは。前世は自宅では一切作らなかつたのに、何が幸いするかわからない。

ベイラーさんにパンを焼きたいと言ったときは驚かれたものだけれど、彼らは色々試す私の姿にも驚いていた。

試行錯誤の結果、材料の配分や、温度の微妙な変化で、味がかなり変わることを発見した。ついでにパン生地を寝かせるという、前世では常識だったひと手間を加えることで、成形しやすくなる上に、きめ細かくしっとりふんわりしたパンに仕上がった。この世界のパンが硬くてちよっぴり酸すっぱいのは、発酵不足もあるんだと思う。

ベイラーパン屋でしか手に入らないパンは結構人気だ。そのせいで、トルノーさんに目をつけられてしまったのだけれど。

数日前に雇ったグランシオも、思いがけずよく働いてくれている。料理も掃除もあまりしたことがないそうだけれど、すぐに慣れて手際がよくなった。……たまにいるよね、なんでもそつなくこなす人。羨うらやましい……

そして今日は、忙しい時間帯を過ぎてから、近所に住む幼馴染おとななじみたちが遊びに来た。名前はサンジャとヤミンだ。この前またトルノーさんが来たことを話すと、二人とも微妙な表情をした。

「しつこいわねえ。なんでそんなにこのお店にこだわるのかしら」

「パンのレシピを知りたがっているのよ。美味おいしいし、珍しいもの。うまくやればアーヤなら貴族のパン職人にだってなれるかも」

そんなの無理だとぶるぶる頭を横に振れば、「それはわかっている」と二人揃揃って頷うなずかれた。実は以前にもお金持ちの家で働かないかと誘われたり、レシピを買い取りたいと言われたりしたことがあるのだけれど、その場でお断りしたのだ。不慣れな場所で、知らない人たちに交まじりてパンを焼くなんて私には無理だと思っし、ベイラー夫妻と一緒に研究を重ねた、思い出の詰つまったレシピをお金に換かえたいとは思えない。

「アーヤしかいないときを狙ねらって来るわよね。現場を押さえたら、とっちめてやるのに！」

年上のサンジャはおつとりしているように見えて、実はかなり気が強い。彼女にはもう旦那様がいるけれど、ヤミンはまだ独身だ。

そんなヤミンには想い人がいる。

噂うわさをすればなんとやら。ドアについている鐘かねが鳴り、そこから入ってきたのは――

「お前ら、また集まっているのか」

「俺はちゃんと見回りしてるんだよ」

レリックはヤミンと同じ十八歳。この国の成人年齢は十六だから、二人とも立派な大人である。

私は一応、二十歳はたちということになっている。拾われた当時、正確な年齢はわからなかつたので、同年代の子供と見比べて年齢を仮定したらしい。そこから年を重ねても、私の成長は芳かんばしくな

く……………童顔と低身長のせいで、未だに子供と間違われることがある。

レリックも幼馴染の一人だ。前はこの辺に住んでいたけれど、父親の出世に伴い、もう少しいい家に引っ越した。成人と同時に兵士になったレリックは、たまに街を見回るのが仕事。でもうちの店の中まで入ってくるのはヤミンがいるときだけだったりする。

お互い憎からず思っている様子の二人がうまくいくといいなあと思うのだけれど、ちょっと裕福な家の娘であるマイラがレリックを狙っているらしい。この辺では、結婚相手は親が決めるもので、ただ見守ることしかできない。

ちなみに、私にはそんな話は影も形も見当たらない。一応、理由はいくつかある。

第一に、この国の美人の定義は、すらりと背の高い女性。低身長で童顔な私は純粹にモテないのだ。見た目でまず恋愛対象外らしい。

グランシオは時々『可愛いご主人様』とか言うけれど、あれは隷属の力のせいでフィルターがかかっているか、自称忠犬としての義務か何かだと思う。

第二に、結婚相手には親族がいることが望ましいとされる。親族同士の付き合いが新たな富を生む、という考えがこの国の根底にあるのだ。つまり、頼るべき親族もない私は結婚相手としては不適格ということになる。

ただでさえ美人の定義から外れている上に、相手にとつて旨味もない。そんな私に結婚は無理だろう。でも、前世からの人見知りで男性とお付き合いしたこともない身としては、それでもいいかなと考えている。

「そういえば、人を雇ったって聞いたんだけど」

サンジャの言葉に、私はぎくりと身体を強張らせた。

「う、うん。そうなの。その、ベイラーさんの、遠縁の人で……………」

ベイラー夫妻の遠い親戚であるグランシオという男性が、昔世話になった夫妻が亡くなったと風の噂で聞き、ここまでやってきた。そこで夫妻の跡を継ぎ、一人でパン屋を営む小さな娘に出会う。ある人物から店を買い取りたいと強引に迫られ、困っていることを知った彼は、娘の身を案じて保護者役を引き受けることにしたのだった——という設定になっている。

「突然人を雇うって聞いて、うちの父も最初は驚いていたけど……………」

そうヤミンが口にしたとき、厨房からひよいとグランシオが顔を出した。

「初めまして。遠縁のグランシオといいます。どうぞよろしく」

突然割って入ってきた長身の男に、ヤミンもサンジャもレリックも目を丸くした。

グランシオの鋭い目は、笑えば意外なほど柔らかくなる。パン屋のエプロンを身に着けてにっこり微笑む姿は、爽やかと言っても過言ではない。「下僕」発言のときとのギャップが激しすぎて最初は混乱したくらいだ。

「グランシオさんっておいくつなの？ ご結婚は？」

「以前はどちらに？」

「はは、もう三十は過ぎていますね。お恥ずかしながら独り身で……………気の向くままに色々な国をフラフラしていたのですが、たまたまフレインの近くまで来たら、若いとき親切にしてくれた

遠縁の夫妻が亡くなったと耳にしましてね……………」

グランシオが神妙な表情で、設定に沿った答えをうまく話していく。

……………犬になりたいって駄々こねていた人と同一人物だとは思えない……………」

遠い目をしているうちに、質問攻めが一段落していた。「ごゆつくり」と言い置いて厨房へ戻っていくグランシオ。その背中を見送ったサンジャは、満足げに頷いた。

「父から聞いていた通り、なかなかしつかりした人みたいね。安心したわ」

「そうね。いい人そう！」

あの男を放っておくと店に来るお客さんの足が切られるかもしれないんです、なんて言えるわけがない。

「ところで、あの髪型って何か理由があるの？」

ヤミンがそう言ったのは、グランシオの髪が一房編み込まれているためだ。初めて会ったときはそうじゃなかった。うちに住むことになった翌朝からだ。

曰く、『ご主人様とお揃い♥』だそうで……………いえ、似合っているけどね!?

私の髪型は、ベイラー夫妻の奥さんが考えてくれたもの。パンを作るのに邪魔にならないように、でも年頃なんだから少しでも可愛らしくしましょうねと、いつも優しく櫛で梳いてから丁寧に編み込んでくれた。奥さんが亡くなってから、一人でちゃんと結えるようになるまで少し大変だったけれど、これも大切な思い出の一つ。

それを友人たちも知っているの、私はしどろもどろになりつつ「あれはベイラーさんたちを偲

んで……………」子供の頃に結ってもらった思い出があるとか……………」などと、適当な言い訳をした。

追及される前に話題を変えよう！

「そ、そういうえば、ご近所に挨拶に行っただけで！」

グランシオと一緒に暮らすにあたり、いつもお世話になっている近所の人々へ挨拶して回った。

用意した設定のおかげか、グランシオの話術のおかげか、訝しがられることもなく、みんな『そりゃよかった』『アーヤちゃんだけじゃ心配だったんだ』と納得してくれたのだが。

「私、これでも一応、成人しているのに、すごく心配されてるんだなあって思ったんだよね」

やっぱ頼りないかなあと苦笑すれば、三人が顔を見合わせる。

「……………お前、見た目ちんまいからなあ。とつくに成人してるようには見えねえし」

正直すぎるレリックのせいで、視界の数字がちよつと減る。サンジャが頬に手を当てて苦笑した。「そうなのよね。この辺の人はアーヤが成人してるってわかってるけど、知らない人からすれば保護者のいない子供が勝手にパンを売っているようにしか見えないもの」

親が亡くなったたり親族がいなかったりする一人暮らしの女性は、保護者役になつてくれるよ誰かに頼むのが普通なのだそう。独り身の女性で保護者役すらいなのは、運か素行か、とにかく何かが悪いという判断になるらしい。

「信用がないから家も借りられないし、仕事にも支障が出るだろ？ いざつてときに金も貸してもらえないし……………」

レリックが不都合になりそうな例を指折り挙げていくのを聞いて、保護者役＝保証人なのだと思

に至った。

テレビもネットもなく、情報の真偽を確かめる術がない世界。親や親族、保護者役というものが、信用に値する人間かどうかの一つの判断基準になっているということか。それならば、ちゃんと親族がいる人が結婚相手として望まれるのもわからないでもない。

「そういう人は、住んでいる地域の長とか、ある程度地位のある人物に後盾になってもらおう頼むのよ。問題を起こしたら放り出されるし、まとまったお金を払わないといけないとか、結婚などの自由まで奪われちゃうとか、色々あるみたいだけど」

ベイラー夫妻が亡くなった後、近所の人たちは私をどうするか話し合っていたらしい。

ところが私は、さっさとパン屋を開けて一人で生活し始めてしまったのだ。

周囲の大人たちは驚いた。あれ？ この子、保護者役いなくても全然困ってないよ、と。

……………すみませんね。こちらの常識知らなくて。

「だけど、やっぱり保護者役をしてくれる人がいるのといないとこのじゃ、全然違うわよね」

よくわからない感覚だけれど、慣習ってやつなんだろうか。

昔からこうあるべきとされているから、そこから外れているのを見るとなんとなく居心地がよくない、あるいは端から見ている眉を顰めてしまう、みたいな……………？

今になってこうして教えてくれるのは、私の保護者役が決まったことで安堵したからかもしれない。慣習というのは馬鹿にできないと思う。それなのに、友人たちも近所の人たちも、何も言わずにじっと見守ってくれていたのだ。

確かに、一人でパン屋をやらなきゃと必死になっていたときに、こうあるべきだと言われても、きつと受け入れる余裕なんてなかっただろう。

周囲の人たちの優しさに今更ながら気づいて、じんわりと胸が温かくなった。

グランシオが周囲に受け入れられたことでホッとしたのも束の間、新たな問題が起きた。

大きな通りに面した場所に、新しいパン屋ができたのだ。値段を聞いてびっくり。明らかに原価割れしている。

「……………あ、あれ、もしかしてうちへの嫌がらせ……………？」

「そう考えてもいいかもね。あんな大安売りする理由が他になさそうだし、ご主人が許して泣きつくのを待っているんじゃない？」

グランシオの言葉を聞いて、すぐにトルノーさんの顔が頭に浮かんだ。だけど証拠も何も無い。材料の買い占めとかされたわけじゃないからパンは焼けるけど、お客さんが来なければ売れない。うーんと唸って考えていると、グランシオが長剣を持って出ていこうとしていた。

「どこ行くの？」

「ちよつと仕留めに」

いったい何を仕留めるつもり!? ……………いえ、具体的に人物名とか聞きたいわけじゃないです。結構です。

どうしよう……………グランシオの下僕スイッチがいつ入るのか本当に予測がつかない。

それは隷属^{れいぞく}の力で支配されている男が『ご主人様のために！』という考えで、具体的な命令がなくとも勝手に行動しようとする恐ろしいスイッチである。グランシオの場合、相手を排除しようとする傾向にある。この世から。

……………危険すぎるう!!

「し、新作でも作ってみようかなあ。グランが手伝ってくれたら、その、嬉しいな!」

「もっちりん手伝いますとも! この犬めにお任せくださいご主人様!」

元気のいい返事とともに、すぐさま必要な道具を台の上に並べ始めるグランシオ。上機嫌なその様子に、こっそり息を吐いた。

……………ああ、今日も数字が減つてくなあ……………

「ご主人、用意できたよ」

にこにこしているグランシオにお礼を言うと、私も台の近くに立つ。材料や器具の前で深呼吸して気持ちを切り替えた。そう、今こそ新作パンを生み出すとき!

目標はカツサンド。

前世でいうところの豚は、角とか生えていてどう見ても地球の豚とは異なるけれど、“豚”として私の頭は認識するし、“豚”と口にすればきちんと周囲に伝わる。こういうの、異世界もののラノベとかだと翻訳機能っていうんだっけ。不思議だけど実に助かる。

買ってきた豚肉を適当な厚さで切り、筋切り^{すじき}して叩いて塩を振っておく。小麦粉と卵とパン粉を

つけて熱した油に入れると、じゅわつといい音がした。

前々から作ってみたかったのだけれど、油自体が少し高価なので、これまで手を出さなかった。でも目新しい物がないと、お客さんと呼ぶことはできない。ちよつと割高でも食べたいと思わせればいけるんじゃないかなと考えたんだけど、どうだろう。

揚げたトンカツを冷ましておく間に、切ったお芋を揚げてみる。ポテトフライって受け入れられるのかな。わからないけれど、せつかくだし私も食べたい。

トンカツが冷めたら野菜と一緒にパンの上に並べて特製のソースをかける。上にもう一枚パンをのせ、きれいな濡れ布巾を被せて馴染^{なじ}ませる。

ソースと肉汁がパンに染み込むと、しっとりしてずっと美味^{おい}しくなるのだ。

振り向けばグランシオの目がカツサンドに釘付けになっていた。

「グラン、試食してくれる?」

「いいの?」

琥珀色の目を戸惑い気味に瞬^瞬かせるグランシオに、もちろんと頷^{うなづ}く。

私だつて、こっちの食べ物でどうしても受け付けないものとかあるし、自分では美味^{おい}しいと思つても、こっちの人に受け入れられるかどうか判断がつかないのだ。

カツサンドを受け取ったグランシオは、大きな口を開け、はぐつと噛みついた。目を大きく見開くと、もぐもぐと咀嚼^{そしゃく}を繰り返して、次はさつきよりも大きく口を開けて食べた。

……………たった二口でカツサンドがなくなった……………

「えと……………男の人には小さかった……………?」

いつもお店に並べているものと同じ大きさに作ったんだけど、実は男の人には物足りない大きさだったとか? 不安を込めて見つめていると、ペろりと唇を舐めたグランシオが目を細めて言った。「すつごく美味^{おい}しいし、食べ応^{おた}えあるね、これ」

「ほ、ほんとう?」

嬉しくて頬^{ほお}が緩^{ゆる}んだ。そんな私から視線を逸^そらしたグランシオが「だけど」と続ける。

「ちよつと目立つかな」

目立つ?

首を傾げる私に、グランシオは眉根を寄せた。

「あんたを欲^ほしがる奴が出てくるってこと」

つまり引き抜きの感じかな?

「他の店になんて行かないよ」

おかしな表情で黙るグランシオを他所^{よそ}に、頭の中で計算する。どれくらいの数なら提供できそうか。値段はいくらにするか。とりあえず、定番のサンドイッチと一緒に店頭^{店頭}に並べてみよう。

結論から言うと、カツサンドはお店には出さないことになった。店頭^{店頭}に並べていたらレリックがやってきて、そのお連れ様がカツサンドを気に入ってくれ、それが定期的な注文に繋がったのだ。

レリックと一緒に来店したのは、第二騎士団の団長補佐アルベルトさん。

ざつくり言うと、第一騎士団は高位貴族の子息ばかりで、王宮などの主要な場所に配属される。それに対し、第二騎士団は下位貴族で編成されていて、王都の街^{まち}や砦^{とりで}などを守っているのだ。レリックたち普通の兵士は平民出身だけれど、騎士団とは同じような立場で詰め所も隣接しているから、たまに一緒に見回り^{見回り}に出る程度には交流があるという。

正直、とても助かった。店頭^{店頭}で販売するのと違い、毎回決められた数を作ればいい。必ず売れるとわかっていいるから安心感もひとしおだ。

ヤミンにもレリックのおかげで助かったことを伝えた。『レリックもたまには役に立つのね』なんて口では言っていたけど、嬉しそうにそわそわしていた。

そして今日も第二騎士団から注文のあったサンドイッチを作る。

普通は二切れを一人分として販売しているのだけれど、肉体労働の騎士がそれで足りるわけがない。交渉の結果、第二騎士団には料金上乘せで特別製のサンドイッチを作ることになった。

騎士用のサンドイッチは一人四切れ。カツサンドは毎日だけれど、卵やハムなどを挟んだ定番のものも日替わりで作る。それとは別に、鶏肉を煮込んだものや、芋を油で揚げたものを付け合わせとして用意した。

特別料金なので庶民にはちょっと高いけど、貴族である騎士団の面々は特に問題ないらしい。普段は自宅の料理人が作った弁当を食べたり、貴族街にあるレストランに行ったりするんだとか。毎回それだと飽きてしまい、庶民派パン屋^{パン屋}が作るサンドイッチに目新しさを求めたみたい。

お給料日には、兵士さんたちも買ってくれることがある。たまの贅^{ぜいたく}沢^{たく}につて。

平民が買えるような値段に設定した場合、かなりの数を売らないと元がとれないかもしれないと不安だったから、今回の件は本当に幸運だった。

カツサンドを馴染ませている間に、もう一種類のサンドイッチを作る。具はハムと卵だ。こちらはこの世界の定番メニュー。ベイラー夫妻がいたときから変わらぬ味である。

今日の付け合わせは鶏肉のオーブン焼きとフライドポテト。鶏肉は昨日から少し蜂蜜を塗っておいたものに、細かく叩いた木の実と香草をまぶして、こんがり焼いた。フライドポテトはこちらの世界のお芋を素揚げして塩を振っただけだけど、騎士団に人気で毎回入れるようにと頼まれている。安価だし、毎日他の付け合わせを考えるよりは、ずっと楽で助かる。

うーん。でも、飽きられる前に新作を考えるべきかな。今度、魚をフライにしてみようかな。タルタルソースの作り方なんて知らないけど。

新作パンの構想を練りながら、大きなバスケットにサンドイッチを詰めていく。第二騎士団からの注文のおかげで、店にお客さんが来なくても困らない。売り上げは以前より少し落ちたけれど、節約すればなんとかなる。

グランシオ曰く、そのうち向こうの方が店を閉めるか、通常の値段に戻すだろうとのことだから、きつと大丈夫。そうなったら今度は別の嫌がらせが始まるかもしれないけど、そのときはそのとき考えよう。不安になつてばかりじゃ、精神が持たない。………割と切実に。

「それじゃあ行ってくるね」

騎士団にサンドイッチを届けるのはグランシオの役目だ。

鋭い目をした男より、地味でも女の子である私に配達してほしいという要望があったのだけれど、『可愛いご主人を、どうして野郎どもの巢窟に行かせなきゃいけないの?』と、グランシオに真顔で却下されたのだった。

* * * *

「ヤミン、これ、たくさんもらったからアーヤちゃんにも持っていっておあげ」

うちの食堂の裏で仕込みをしていると、母がリングゴの入った籠を持ってきた。野菜を卸してくれる商人に愛嬌をふりまいたらオマケしてくれたんだよね。母から籠を受け取ると、「あんまり無駄話してくるんじゃないよ」と釘を刺された。わかってるって!

ベイラーパン屋に行ったら、お店はがらんとしていた。すぐに人でいっぱいになってしまっ小々な店が、こんな時間に空いているなんて珍しい。それに、いつもなら朝の段階で売り切れているはずのパンが売れ残っていた。

「何かあったの?」

アーヤに聞いてみたら、近くに商売敵が店を開いたらしい、かなり安く売っているからお客さんを取られたみたいだと教えてくれた。なんて陰険なやり方!

初めてアーヤと会ったのは、私が父の食堂で野菜の皮むきを手伝うようになった頃だ。会ったと

いうか、見かけたと言うのが正しい。

その日も食堂の裏で皮むきを手伝っていると、ちょっと離れたところをベイラーさんの奥さんが小さな子供の手を引いて歩いていった。

それは黒髪の女の子で、奥さんに手を引かれるから仕方なく足を前に出しているような感じだった。歩くたびに首がカクカクと揺れて、頭が落っこちちゃうんじゃないかと心配した記憶がある。

誰だろうと思って父に聞くと、ベイラーさんが引き取った子だと教えられた。お喋りするどころか、自分から動こうとすることも無いという。

『可哀想に。ここに来る前、よほど恐ろしい目に遭ったんだらうな』

そのときは、ふうん、と思っただけだった。

数日後、ベイラーさんの店にパンを買いに行くと、店の中にあの女の子がいた。以前はテーブルがあって、そこに花を生けた花瓶が置かれていたのだけれど、テーブルがなくなって、代わりに椅子が置かれていた。

その椅子にちょこんと座っている姿は、お人形さんみたいだった。

『この子ね、アーヤっていうの。仲良くしてあげてね。ヤミンちゃん』

ベイラーさんの奥さんにそう言われて一応頷いたけれど、人形みたいな女の子相手にどう仲良くしたらいいのか、ちっともわからなかった。

そっと近づくと、不意に目が合った。綺麗な黒い瞳には、驚きも怯えも何もなかった。少し前まで一緒に遊んでいたサンジャは、家業の織物を手伝うようになってからあまり外で遊ばなくなった

し、お金持ちの娘で自慢ばかりするマイラのことは好きじゃない。でもこの子なら、私と遊んでくれるだろうか。

それから私は、時間があればアーヤのところへ通った。ぼんやりしていることが多いけれど、遊びに行くとき手を繋ぐと一緒に来てくれるようになった。

時々サンジャが加わって、たまに男の子たちとも遊んだけれど、アーヤは男の子が苦手みたいで、そんなときはいつも私やサンジャの後ろでジツとしていた。

あるとき、サンジャと三人で遊んでいると、大人の男に声をかけられた。行商でこの街に来たという男は、『いい物あげるから一緒に行こう』と誘ってきた。いい物ってなんだらうと興味を引かれたけれど、サンジャがよく知らない人にはついていけないと断った。

なのに『いいから来い』と腕を引っ張られ、痛みを漏らしたそのとき、アーヤが突然男の………その、脚の間を蹴り上げた。

アーヤが素早く動いた——！ というか、攻撃した!?

股間を押さえて蹲る男よりも、そちらの方が私たちには大事件だった。

その頃のアーヤは、こちらから促せばのろろと行動に移せたけれど、自分から動いたのは初めて見た。ベイラーさんにそのことを話すと、ちょっと考えてから『大事なお友達を守ろうとしたのかな?』と言ってくれたので、私たちは嬉しくなって笑った。

そうやって何年もかけて一緒に過ごすうちに、ようやくアーヤが笑うようになった。会話も少しずつできるようになっていって、ちょっと見た目はちんまいけど、普通の女の子になってきたなあ、

というときに。

ベイラー夫妻が亡くなった。馬車の事故だった。

訃報を聞いたアーヤは悲鳴をあげて倒れた。目を覚ますと泣いて、泣き疲れて眠って、の繰り返し。このままじゃ、また心が壊れてしまうんじゃないかと心配でたまらなかった。

葬儀を準備する間も、なるべくアーヤの傍にいた。昼間は私やサンジャが傍にいて、夜は近所のおばさんたちが交代で付き添った。

ベイラー夫妻がどれだけアーヤを大事にしていたか、三人がどんな風に家族になっていったか、みんな知っていたから、慰めるための言葉なんてなかった。私は、アーヤがベイラーさんたちの後を追ってしまっんじゃないかと気が気じゃなかった。

お葬式が済んでもアーヤの目には光が戻らなかった。

『あの家で一人で暮らすなんてアーヤちゃんには酷じゃないかしら………』

『誰かが引き取った方が安心かもねえ』

大人たちが色々と話し合っているうちに、ある日突然アーヤはお店を開けた。数は少なかつたけれど、店先にはちゃんとパンが並んでいた。

周囲の驚きなんて全然気にも留めないで、泣きはらした目でなんでもないように笑って。

『大丈夫なの？』と月並みな言葉しか言えなかった私に、アーヤはにっこり笑ってみせた。その胸に手をおいて、笑ったの。

『大事なものはぜんぶここにがあるから、私は大丈夫だよ』

どこかの家に引き取られたら、どうしてもその家業を手伝うことになる。だからベイラーさんのパン屋を継ぐなら、一人で暮らしていくしかない。当時、アーヤがそこまで考えていたのかどうかはわからない。働いていないと悲しくて仕方なかったからかもしれない。

でも私は自分の友達が誇らしかった。外見は幼く見えるけど、アーヤは見た目よりもずっとしっかりしていて、頑固で、そして強いのだ。

アーヤから商売敵のことを聞いた後、急いで家に帰って父に伝えると、うちの食堂で使うパンをベイラーパン屋から仕入れようと言ってくれた。アーヤが一人でお店を始めたときにもそんな話が出たけど、店頭で売る分を作るだけで精いっぱいだからと実現しなかったのだ。

早く教えてあげたくて急いで引き返すと、グランシオさんが店先を掃き清めていた。

「こんにちは、ヤミンさん。そんなに急いでどうしました？」

グランシオさんはベイラーさんの遠い親戚で、今はアーヤの保護者役でもある。近所の大人たちの中で、グランシオさんがアーヤの婿候補にされているのは、アーヤには内緒だ。

保護者役といっても普通、年頃の男女が一つ屋根の下に住むことはない。アーヤは自分の結婚なんて視野に入れていないから、まったく気にしていないみたいだけ。

グランシオさんが一軒一軒、丁寧に挨拶して回った結果、近所の年配者たちはグランシオさんをアーヤの婿候補として認めるようになった。うちの父なんかも、『あれはなかなかしつかりした男だ』と褒めていたから、いったいどんなことを話したのか気になる。

アーヤをいつまでも一人にさせていることに、みんな落ち着かない気持ちでいたけれど、本人が頑固なせいもあって、ずっとそのままだった。そんなアーヤが保護者役として受け入れたばかりでなく、一緒に住むことに同意したグランシオさんは、かなり期待できると睨んでる。

「あのっ、アーヤから新しいパン屋のこと聞いて！ 困ってるなら、うちの食堂でパンを仕入れるよって父が……………」

グランシオさんはちょっと瞬きした後、困ったように笑って教えてくれた。

アーヤが新しいサンドイッチを作ったところ、騎士団が定期的に購入してくれることになったので、生活する分には困らないのだという。

「……………なんだ……………」

私が一人で焦って走り回っていただけで、あの子は自分でとつくに解決してしまったみたい。ホッとしたのと、徒勞に終わって気が抜けたのとで、思わずふふっと笑いが零れた。

「アーヤって、見かけは子供だし、普段は頼りないけど、こういうとき結局自分でなんとかしちゃうんですね」

ちよっとは頼ってくれてもいいのになあ、なんて思っていると、

「そうですね。もつと頼ってくれていいのにな」

私の気持ちとまったく同じことを言うその声に、とつても実感がこもっている気がして、私はまじまじとグランシオさんを見つめてしまう。

赤茶色の髪の毛に、ちよっと鋭いけれど綺麗な琥珀色の目。顔立ちはずつごく整っているってわ

けじゃないけど、どちらかというところ格好いい方だと思う。

背が高くてがっしりしている身体は丈夫そうで、病気とは無縁に見える。——合格。

アーヤと一緒に働く姿を見ても、文句一つ言わずになんでもやってくれる。——合格。

休日にはアーヤの買い出しに付き添って荷物持ちとかしてるし、裏庭で薪割りとかしている姿も見かける。——合格。

野菜を洗ったり切ったりするアーヤと穏やかに話をしている様子は、傍から見ていると微笑ましい。——合格。

それに何より、グランシオさんはアーヤを大事に想ってくれている。総合的に考えて、文句なしの合格だ。

まあ、ちよっと年齢は離れているし、見た目も大人と子供って感じだけでも。お揃いで三つ編みしているのも、アーヤの方はベイヤーさんの奥さんを偲んでいるだけって私は知ってるけれども。なかなかお似合いのカップルだ。

グランシオさんがお婿になるなら、アーヤがどっかの家に嫁入りして遠くへ行くこともないだろうし……………なんて打算も働く。

アーヤは結構鈍いから、グランシオさんには頑張ってもらいたい。

とりあえず心の中で応援して、私は父に事の次第を伝えるに行くことにした。